

今朝与えられた 32 節～43 節を読む上で何より目を引くのは、中風を患っていたアイネアが癒され、死んでいたタビタが起き上がった点です。医者から病気が治らないと診断された人や、重い後遺症に苦しむ人、亡くなった人を生き返らせてほしいと言う思いは、この出来事から 2000 年経った今日でも、誰しもが抱くものかと思います。しかし、信仰的に言えば、病気の治癒などの願いが適うかどうかは神様の御心次第で人間にはそれをどうすることもできない、という他ありません。では、今日の箇所は何を伝えようとしているのか、私は、それは神様が数多くの名も知れぬ人々を用いて奇跡を行われる方であることを教える物語だと思うのです。

病気で視力、聴力を失ったヘレン・ケラーの家庭教師であり、サリバン先生の名前で知られるアン・サリバンは幼くして天涯孤独となり一切の食事を拒むようになりますが、ある看護師との出会いを通して生きる希望を取り戻します。その後、盲学校を首席で卒業したアンは、ヘレン・ケラーの家庭教師となります。言うことを聞こうとしないヘレンにアンは常にこういきかせ続けたと言います。『大丈夫、あなたはひとりじゃない』それは自身が生きる希望を取り戻すきっかけとなった看護師が毎日彼女にかけてくれた言葉でした。

私はこのアン・サリバンの生涯が、今日の聖書箇所重なって見えたのです。もし、ヘレンとアンが出会っていなかったなら。絶望の中で死を待っていた少女時代のアンを訪ねた名もなき看護師がいなかったなら…。おそらく、今日私たちが知るヘレンの活躍もアンとのエピソードも存在していなかったでしょう。

そして、それは今日の私たちの周りでも知らずに起こっていることだと、私は考えます。神様から与えられる使命は、タビタのように地味で人目にふれないような奉仕であるかもしれませんが。タビタのように死後、誰かに感謝されることがないことかもしれません。しかし、その働きには必ず神様が伴われていると思うのです。一見、無駄に思える何の意味のない働きを通して、自分では知らないところで神様の御業が起ころうとしている。私たちには人々があっと驚くような奇跡を起こす力はないかもしれませんが。しかし、そうした名もなき一人ひとりの縁の下の働きが一つひとつ繋ぎ合わされる時、私たちが知りもしない、はかり知ることできない、神様のご計画が実現するのです。